

---

# 灰色の涙

弥招 栄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰色の涙

### 【Nコード】

N2438C

### 【作者名】

弥招 栄

### 【あらすじ】

売れない役者、近藤叶人は、巨匠ウィリアム・マーニーがメガホンをとる原爆映画のオーディション会場にいた。両親が被爆者である自分なら、もしかして有利なんじゃないかという思惑とともに。だけど……今の日本が平和なのは、本当に原爆が戦争を終わらせたからなのか？

## 一話：オーディション（前書き）

この作品は、「みちのく芸能祭り 花火大会」のため、風海南都先生のプロットを基に書き下ろしたものです。

## 一話：オーディション

……うわあ。本物だよ。

後樂園にあるスタジオで、叶人<sup>かのと</sup>はいつも実際の歳よりずいぶん若く見られる童顔を、軽くこわばらせていた。それは彼だけのことでない。彼同様、スタジオの壁沿いに並んでいる若い役者連中も同じこと。

なんで、こんなチヨイ役のオーディションにまであの人がいるんだ？

基本的なエチュードとカメラテストを終えて、あとは面接を残すのみ。そのために、この部屋に移動して

叶人のちょうど正面、普通の折りたたみ椅子に座っているのは、ハリウッド俳優にして、アカデミー監督、そして、叶人たちが端役を獲得しようとオーディションを受けている映画の製作総指揮兼監督、ウィリアム・マニーその人だった。ざっくりとしたセーターに擦り切れたジーンズ、そしてスニーカー。年老いたとはいえ、スクリーンの中でマグナムをぶっ放していたころと変わらぬ眼光。もう、彼に会えただけでオーディションに来た甲斐があったよ、そんな叶人のひそかな思いも無理はない。父親の反対を振り切って二十歳で大学を中退し、演劇界に飛び込んですでに十年、一向に芽が出ない売れない俳優の叶人にとって、彼は雲の上の人物どころか、神様そのものだといってよかった。

そんな、彼を含めた大根たちの視線を集めて、神様は彼の両側に居並ぶスタッフに何事かを言った。それを受けて、スーツを着た一人の男が立ち上がる。彼が通訳なのだろう。

この映画は、アメリカ映画にもかかわらず全編日本語でつづられる。原爆を投下する側、そして落とされる側。それぞれの視点を、

別々の映画として撮るという試みらしい。ホワイトハウスとエノラゲイの基地があつたテニアン島を舞台にした米国側の撮影は、すでに克蘭クインしているという話だ。あちらはもちろんアメリカ人ばかり。そしてこちらは、キャストはもちろん、主要スタッフのほとんどを日本人が占める。だから、オーディションの条件に、英語のスキルはなかった。また、そうでなければ、グッドモーニングとアイラブユーぐらいしか英語を知らない叶人が、ハリウッド映画のオーディションを受けようなんて気になるはずがない。

「……」

そのとき、会場の妙な空気に、叶人は気づいた。あれ？

「近藤叶人さん？」

少し不審そうな通訳の声。

「……お、俺？ は、はいっ」

裏返つたその返事に、ひそやかな笑いが会場に広がる。叶人の顔が、一気に紅潮した。なんで最初なんだ。アルファベット順じゃないのかよ。さっきまでそうだったじゃないか。そう憤つてみても、ぼんやりしていた彼が悪いことに変わらない。あわてて神様の目の前に進み出る。

「ええと。近藤叶人。劇団新劇座所属」

「ミスタマニーがインタヴューします。リラックスしてください」

通訳がそう言つて肩を二、三度揺らし、笑つてみせる。叶人はちらりと神様を見る。ギラリとした眼光。引きつったような笑みを口元に浮かべるのが精一杯だ。

神様は、目を叶人に向けたまま、通訳に何事かを伝える。

「君は、アー、広島の出身だということですが」

「はい。ミスタマニー」

「ビルトヨンデクダサイ」

にこりと笑つて口を開く神様のたどたどしい日本語に、かえつて叶人は緊張した。

「イ、イエス、ビル」

通訳が思わず吹き出して、あわてて顔を引き締める。

叶人がこのオーディションを受けた理由のひとつがそれだった。広島映画を撮るのに、広島出身だったら有利ではないのか。もちろんそんなに甘いものではないことくらい、骨身にしみて理解していたが、それでも、端役に引つかかるくらいのメリットはあるんじゃないかと期待していた。だけど

「君は、原爆に焼かれた故郷をどう思う？」

そう問われて叶人は言葉に詰まった。どう思うと言われても……彼が生まれたときには、もう広島に原爆の傷跡は残っていないかった。もちろん原爆ドームはあるし、閃光で灼かれた人影の残る階段とか、被爆建物もいくつか残っている。それは知っている。平和教育の一環で、平和公園の資料館にも何度か行った。だけどそれらは彼にとって、ただの壊れかけた、古臭い建物であり、気色の悪い資料以外の何物でもなかった。

「俺が生まれたときには、もう復興していましたから。百年は雑草も生えないといわれた町を、そんなにも早く立て直したのはすごいと思います」

通訳と神様との間で交わされる言葉。

「君のご家族は、被爆体験をしているのかい？」

「はい、両親とも」

ビルの表情が少し変わった。興味深げに、叶人を見つめる。

「君は、アメリカ軍が広島に原爆を投下したことをどう思う？」

「あ　もちろん許せないですけど、でも戦争だったんだし……」

「戦争だったから仕方がない？」

「い、いえ。やっぱり、核兵器は使うべきではなかったと思います」  
叶人の背を、冷や汗が流れる。広島で育って、並みの日本人よりは原爆について教育を受けているはずなのに。ありきたりの言葉しか出てこない。

「広島や長崎の人たちは、世界中から核兵器を無くすべきだと主張しているが、それについてはどう思う？」

「もちろんその通りだと思います」

「それが可能だと思う？」

「困難ではあるでしょうけど、やらなければならないと……」

「しかし現実には、核の抑止力によって世界の平和は保たれている。もし核を無くすことが可能だったとして、それによって起きる戦争を君は容認できるのかい？」

「いえ、それは……」

ビルが立ち上がって、叶人の目の前に立った。背の低い叶人の視線に合わせるように少し背をかがめ、口を開く。少し遅れて、通訳が問う。

「原爆を投下したことで、戦争を早く終わらせることが出来た。もし、その出来事がなければ、さらに百万を超える貴重な命が失われる結果となっていただろう。それだけじゃない。核の威力を明らかにしたことによって、それ以降世界的な規模での大戦は起きていない。つまり、数千万、ひよっとしたら数億もの命が戦争の犠牲になることを逃れているんだ。これは、アメリカが原爆を投下したおかげだと思わないか？」

「違うっ！」

思わず叶人は声を上げていた。ビルの言うこともわからないではない。しかし彼の脳裏に、父親の姿が浮かんでいた。頑固なだけにとりえの、そして、役者になるという叶人の夢を決して認めようとしなかった父親なのに。叶人はずいぶん遅くに出来た子だったから、もう七十を超えている。原爆の熱線を受けたときはちょうど十才。そして、今でも左腕に残るケロイド。叶人が子供のころ、たった一度だけ見た父親の涙。被爆の後遺症による白血病で死んだ、叶人の母親の枕元。抗がん剤で禿げ上がった妻の頭の横に両手をつき、声を押し殺して泣く父親の姿。

「何が違う？」

「たとえば、今が平和なのが、あの、八月六日の出来事のおかげだとしても」

叶人は、ビルの青い目を正面からにらみつけた。

「それは決して、アメリカの、原爆のおかげなんかじゃない。熱線に焼かれ、爆風に飛ばされて死んでいった人たちの、放射能に犯されて、何年も、何十年も苦しんだ人の、そんな、何十万もの人々が犠牲になったおかげじゃ。そがあなこともわからんワレが、広島映画を撮る？ 笑らかすなっ！ ワレみたいなんが撮る映画なんざ、こつちから願い下げじゃ」

叶人はもう一度ビルをにらみつけると、そのままきびすを返して出口へ向かった。壁際の役者たちがあきれた顔で見送る中、重い扉を開いて、そのままスタジオの外に飛び出す。とたんに、二月の寒い風が、叶人の身体にきりつけてきた。あっという間に沸騰していた頭が冷える。

「ああ……」

叶人は厚い雲に覆われた空を仰ぎ、頭を抱えた。そしてそのまま、がつくりと歩道に膝をつく。

「やってしもうたあ。座長にどやされるう」

新劇座にオーディション合格の通知が来たのは、二週間後のことだった。

## 二話：引導

「なあに考えてやがんだ、あの……ミスターは」

叶人は座長である荒田ににらまれて、吐きかけた悪態を飲み込んだ。彼の手には読み終えたばかりの脚本と配役表が握られている。

新劇座の小さな練習場に、今は荒田と叶人の二人だけ。合格通知が届いたと、呼び出されたのだが。

「なんだ、喜ばないのか？」

パイプ椅子に座ったまま見上げる荒田の不思議そうな表情に、あわてて叶人は首を振る。オーディション会場での出来事は、彼には伝わっていないらしい。その幸運をふいにしたくない。いつもこやかなふくふく顔が怒ったときにどう変わるのか、叶人以上に知っているものはそういないはずだ。

「そんなことないすよ。嬉しいです」

それはもちろん本当だ。一度は諦めていただけに、ひとしおいつてもいい。だけど

「でも、この役はないでしょう？」

「いい役じゃないか」

「いい役すぎますよ」

叶人はもう一度リストに目を落とした。トップを飾るのは、昨年アカデミー候補に上り、いまや知らぬものはいない大俳優。これは、この映画の制作が発表されたときから噂されていたから、驚きはない。その下にも、なじみのある俳優の名が並ぶ。一人、二人、三人。そして……

・加藤匡史    近藤叶人

それほど出番が多いわけではない。主役との絡みはまったくない。だけど、要所所で織り込まれる加藤視点のカットインは、間違はなく全体の色を決める。それに

「俺の柄じゃないすよ……」

「ふん」

荒田は、叶人の手から脚本をもぎ取り、ぱらぱらとめくる。原爆で家族をなくした青年。悲しみと憤りを、短い時間、少ない台詞で表現しきらなければならぬ。

「まあ、似合わない役だよな」

「ですよねえ」

「なあ、コン。お前の持ち味はなんだ？」

へ、と、間の抜けた声をもらしながら、叶人は荒田の顔を見た。演劇の世界での経験は、すべて新劇座で積んできた。芝居のいろはから舞台での呼吸まで、すべてを叩き込んでくれたのが、この荒田だ。新劇座における脚本、演出はもちろん、テレビドラマや映画にまで活躍の場を広げている彼は、コメディタッチの軽妙な作風で、一般にも人気が高い劇作家、兼演出家、兼俳優。彼ほどに、叶人の演技を知っているものはいない。

「キレのある台詞回しと、無駄にまでに高いテンションです。笑いを求めるシーンには欠かせない……？」

「お前には、その才能はないよ」

「まあ、何言ってるんですか。俺が出たらどつかんどつかん」

「バカ、そりやお前、オレの演出のおかげだろ。なあ、コン。お前、うちの劇団、辞めろ」

突然の荒田の言葉に、何とと言い返そうとして、叶人は息を呑んだ。まるで、公演初日を明日に控えながら、思い通りに仕上がりな舞台を見つめるときのような、苛立ちを含んだ荒田の目。

「お前は気持ちのいいヤツだしな、芝居にもまじめだから何とかしてやりたかったんだが、駄目だ。最初っから、ろくな才能もなかったしよ」

「ちよつと……座長？」

「仕方がねえから、うちで使えるうちは使ってやろうかってな、まあ、オレにはそれが精一杯だったんだが、どうやらウィリアム・マ

二一には、別のお前が見えたらしい」

そう言って、脚本を、ぽんと叶人に投げ返す。

「まあ、勘違いだろうとは思っただけだな。だけど今のまんまじゃ、どうせこの世界でお前に先はないさ。今の殻を破る気がないのなら、さつさと足を洗っちまえ。破るだけの中身がないんなら、やっぱりさつさとやめちまえ」

そして、荒田は叶人の肩をひとつ叩くと、部屋から出て行った。

叶人の手元に残されたのは、一冊の脚本だけ。

「くそがつ！」

叶人が蹴り飛ばしたパイプ椅子が壁に叩きつけられる音が、狭い練習場に響いた。

「やってやんよっ！ 見てろよっ、くそっ！」

## 『灰色の雨』〈Tears by Fallout〉

一九四五年、日本の敗色が濃厚であることは、もう明らかだった。すでに大方の制空権を失い、B-29による無差別爆撃に本土の都市はさらされていた。効果的な反撃手段を見出せなくなっていた軍部は、更なる泥沼に日本国すべてを引きずり込もうとしていた。

七月二六日。ポツダム会談での合意にもとづく、降伏勧告の宣言。その、黙殺。

本土決戦、一億玉砕をあくまで主張する陸軍と、終戦の道を模索しながらも、弱腰にならざるを得ない外務省。

軍事の、そして外交の専門家たちが、戦の趨勢をこのときにおいて見誤るはずが無い。彼らの懸念はただひとつ。このまま終戦を迎えたときに、玉体はどうなってしまうのか。

それを最も感じていたのは、玉体そのものである、昭和天皇裕仁、

その人だった。

映画は、立憲君主たらんと己の意思を押し通すことを良しとしない信念と、己の名を叫びながら死んでいく兵士たち、無差別爆撃に焼かれていく国民たちに対する哀れみの念、それらの間で板ばさみになる“人間” 裕仁の苦悩を縦糸に、そして、繰り返される空襲におびえながら、“神国日本” の勝利を信じて日々の暮らしを続けるひとつの家族の情景を横糸に織り込みながら進んでいく。

子供たちのはしゃぐ声が響く図書館の片隅に、叶人の深いため息が溶け込んだ。

目の前の机に積み上げてあるのは、映画の舞台となる終戦前後の資料の数々。今開いていたのは、広島、長崎の被爆者たちの体験談をつづったものだ、が……

叶人は東京に出てから、自分が広島に生まれ育ったことを意識することはあまり無かった。あるにしても、広島弁を珍しがられたり、劇団でイントネーションを徹底的に矯正させられたりしたときくらい。それは別に、広島の間人ではなくても経験することだろう。

だけど……

叶人は、被爆者の体験談を、読み続けることが出来なかった。それが悲しい話だから、残酷な話だから、だから読むことが出来ない、そういうわけではないと思う。

（白黒の映写機が映し出す、焼け焦げ、積み上げられた、人だった“物”）

（ぼろぼろの服を着せられ、やけどで皮膚がずるむけてしまったマネキン）

学校で、平和記念館で、幾度も繰り返し見せられてきた映像や資料。平和教育とは名ばかりの、戦争の、核兵器の恐怖を子供に叩き込むための、毎年のように繰り返される時間。それは常に、母の死と、父の涙、そしてケロイドと結びつく。

（夏の朝に鳴り響き、そしてすぐに解除された空襲警報）

（太陽さえ暗く感じるほどの光の玉と、爆風）

（軽々と吹き飛び、叩きつけられる身体）

被爆者たちの語る”そのとき”の記憶。それはもちろん叶人自身の記憶ではない。彼らの体験を自分のものとしてリアルに感じているわけでは決してない。ただ、まだ己の人格が固まる前に刻み込まれた、恐怖の記憶。死の臭い。

（崩壊した家の下敷きになり、少年の目の前で燃えていく父親と姉弟）

（爪の先から焼け爛れた皮膚をぶら下げ、幽鬼のごとく歩き続ける人々）

（赤子を抱いた母親の形をした、やけどつくい）

最後に読んだのはもう二十年近く前のことなのに、容易に思い浮かべることができるマンガの描写。はだしのゲン。

何かが違うな。

叶人は組んだ指を頭上で裏返して思いっきり背伸びをすると、もう一度ため息をついた。

冷静になってみれば、荒田があのような態度を取った理由は、よくわかる。今の自分に満足してしまっている叶人に、発破をかけたのだろう。だけど、それが解ったからといって、劇団に復帰させてくれるわけではなく、叶人には、この映画にかけるしかもう道は無かった。幸いクランクインにはまだ時間がある。それまで出来るだけの役作りをと思ったのだが。

確かに叶人の両親は被爆者で、付け加えるなら、彼自身が被爆二世と呼ばれる人間で、そして広島で育った人間として、平和教育も受けていて。たぶん、あのオーディション会場にいる誰よりも、この役を演じるための背景は持っているはず。いや、役者であるならば、プロであるならば、そのような背景はかえって邪魔になってしまうのか……いや、そうではない。

叶人が演じることになっている男、加藤匡史。二十二歳。広島で

生まれ、市内の紙屋町で営業していたパン屋で修行し、幼いころの事故により曲がらなくなってしまうた右足のおかげで、徴兵を免れている。

とはいえ戦場に送られることが無いだけで、郊外の軍需工場に徴用され、そこで働いていた。パン屋に残るのは、まだ現役の義父と、妻の紗枝。そして、生まれたばかりの赤ん坊。米の配給が滞っていた当時、小麦粉にふすまやとうもろこしを入れて焼いた粗末なパンはそれでも貴重なご馳走だった。第五師団司令部などの重要な拠点がありながら、本格的な空襲を受けたことのない広島には多くの人々が流れ込んでおり、家業を手伝うことが出来ないことを申し訳なく思いながら、その日も早朝から工場に向かう。そして

さまざまな資料や脚本の描写が呼び起こすこの恐れは、決して『加藤』が感じたものではない。幽霊や怪談が怖いのと、子供が暗闇を怖がるのと、一緒だ。現実ではなく、未知のものに対する恐怖。ふと、叶人は初めて東京で過ごした夏を思い出す。

八月六日の朝。広島ではすべてのチャンネルがいつもの放送を取りやめ、早朝の平和公園を映し出す。粛々と進められる式典。“その”時間に突如鳴り響く、サイレンの音。黙祷する人々。泣き崩れる年老いた遺族。何十年もの時を経てよみがえる怒りと悲しみ。それらすべてが東京には無かった。八月六日の朝、テレビではいつもと変わらない人たちが、いつもとそんなに変わらないニュースを読んでいた。そんな、いつもと変わらない日々が紛れ込んだ、その日。

驚いた叶人は、友人たちに尋ねた。子供のころ、平和教育ってあったよな？ みんな首を横に振った。原爆記念日っていつだか知っているか？ 半分が間違った。それを見て、叶人は気が楽になったのを覚えている。やっぱり、この国にはもう戦争は無いんだ。それが妙に嬉しかった。だから、それからずっと、戦争なんか忘れて生きてきた。なぜなら、この国は、平和なんだから。

「ああ、もう、くそっ」

叶人は小さく悪態を吐き出してから、立ち上がった。まだ目を通していない資料を数冊借り出してから、図書館を後にする。別に、こんな役作りしても意味無いんじゃないのか。たとえ何らかの結論を出せたとしても、ビルが一言いえば、自分の芝居なんか簡単に変えられてしまう。いや……変な先入観なんかつけずにただ演技すれば、演技をつけてくれるんじゃないのか。そう、荒田のように

「ちがうっ！」

叶人はそう吐き捨てて首を振る。ずいぶん日は長くなったとはいえ、すでに暮れかけた空の下、厚い本を抱えてぶつぶつぶやく彼を、通行人が避けて通る。それにも気づかずに、叶人は歩き続ける。  
(殻を破るつもりが無いなら、やめちまえ)

荒田の演出に従っていればウケる。ぼんやりとした寝起き、暖かい布団に包まって夢の残滓を反芻しているときのような、生ぬるい幸せ。それが今の自分だ。平和な今に安住している自分。自分が経験したわけではない戦争の記憶なんて、しょせん悪夢と代わりがない。目覚めてしまえば、容易に忘れてしまう。

(芝居ってというのは、夢なんだよ)

荒田と初めて酒を飲んだとき、彼が語った言葉。

(お客さんはさ、舞台を観ているときは現実を忘れる。いや、俺たちが忘れさせないやいかん。小屋を出たときに、ああ、夢を見てたんだと、思わせなきゃいかん)

(でもな、夢の登場人物はさ、目が覚めたらだめなんだ)

(そいつにとつて、夢が世界なんだからさ)

(一緒に夢の中で生きようぜ)

酔っていてさえバカな話だと、心の中で笑ったものだ。

だけど結局、バカな話が真実で、自分は夢の世界ではなく、まどろみの世界で生きていただけだった。

叶人は、人の波を避けて路地に入ると、ビルの壁に背中を預けた。そして、携帯を開く。悪夢を現実として生きていた人へと続くナン

バ  
！  
。

### 三話：父親

『はい、近藤です』

「ああ、俺やけど」

『おお』

電波越しに聞こえる、のどに絡んだ痰を切る音。

『どしたんな』

叶人は、携帯を持ち直した。最後に父親の声を聞いたのは、いつだったろうか。正月にも、その前の盆にも電話一本しなかった。強烈な印象として残っているのは、大学をやめて役者になるという決意を伝えたときの、最後には怒りと失望を押し殺した、諦めの声。それから十年、幾度か会いもしたし、その倍は電話越しに話した。細切れにされているからこそわかる、時間の流れ。老けたな。声を聞くとびに感じる思いを振り切る。

「ん、ちよつと聞きたいことがあつてな。今ええか？」

『なんなあ……ちよつと待て』

ごとごとと、何かを引きずるような音が聞こえる。そして、何かがきしむ音。ああ　ふつと脳裏に、台所に置かれていた椅子が浮かぶ。だけど、そのぎしりという音は、叶人の記憶にあるものよりもずいぶん弱い気がした。　痩せたのか。受話器の向こうで繰り返される、湿った咳の声。そのたびにきしむ、椅子。

「大丈夫か？　風邪か？　氣いつけな」

『ワレに心配されるようなこたあ、なあわ』

その頑なな声にイラつく。完全に暮れてしまった目の前の道路を、なんだか楽しそうに笑いさざめきながら通り過ぎる少女たち。叶人は軽く目を閉じて、息を吐く。

「なあ、俺は今まで一回も聞いたことなかったけど、たぶん、あん

まり思い出しとうないことやとも思っけど……」

『なにごちゃごちゃ言いよんな』

「……おやじが、原爆に遭ったときのことを教えてくれんか」

ふ、と電波に空白が混じった。ひゅう、ひゅう、という喉の鳴る声。それが、街のざわめきを圧倒する。

『なんで、そがあなことを聞くんな……今頃』

叶人は少しだけ震えた。その声は、年老いた父親のものではないような気がした。

「俺、今度な、映画に出ることになったんよ。ウィリアム・マニーって知らんか？」

『知らん』

そっけない否定の言葉。だけど、NHKの連続テレビ小説だけが楽しみな彼なら、知らなくても仕方がない。叶人は構わずに続ける。「アメリカのハリウッドの、すごい監督なんだけどな、その人が今度撮る映画で、俺、けっこうええ役をもうて」

叶人は大きく息を吸った。それを一瞬止めて、一気に吐き出す。

理由はわからない。だけど、大学を辞めた、そう伝えたときよりも、それは大きな決心を必要とした。

「原爆で、家族をみんな失くしてしまう男の役なんだ」

それだけ言っつて、受話器の向こうに耳をすます。静寂を圧倒する、街のざわめき。

「今度の映画、俺にとってすごい大きいチャンスなんよ。ハリウッドの監督が全編日本語の映画を撮るのなんか初めてのことじゃけ、絶対に日本で話題になる。そこで俺の演技が認められたら」

『ワリヤア、河原乞食になって恥を晒すだけじゃ飽きたらんと、ピカのことまで晒しもんにする気か』

突然の父親の怒声が、叶人の耳を撃った。それほど大きな声だったわけではない。しかし、叶人の頭に、カッと血が上る。

「そっじゃないっ！」

ざわめきに負けないように、声を高める。強く握り締めた携帯が、

みしりと音を立てた。

「こないだ、劇団を放り出された。だからといって、諦めるつもりはない。どんなに小さいプロに入っても、役者は続ける」

そう、自分に言い聞かせるように叶人は続ける。荒田の思いは理解できても、どこにも所属していない、帰るところがない、そんな宙ぶらりんな状況には、慣れていない。マネジメントは、映画の撮りが終わるまではしてくれとはいえ、いや、だからこそ、自分がもう新劇座の人間ではないと思い知らされる。

「でも、こんな機会は、もう二度とない。じゃけ」

『なにが言いたいんな。はつきりせえや』

「監督は、俺が広島で生まれた二世じゃいうことを知つとる。じゃけ、俺はこの役に選ばれたんじゃ思うとる。でも、俺には、あのころのことはわからん。でも、おやじなら……」

『ピカを落としたアメリカの映画が、何をやるゆうんな。ワレは母さんがなんで死んだか、忘れたんか』

「忘れとらんつ！ アメリカもなんも関係ない。演<sup>や</sup>るんは俺や」

興味深そうに覗き込んでくるビルの青い瞳。心の中で、それを睨み返す。

「監督がどんな映画にしよう思うとるんか、俺のシーンをどうしよう思うとるんか、まだぜんぜん知らん。じゃけど、俺は、他の者<sup>もん</sup>じやない広島の人間として、被爆二世として、……おやじとおふくろの子供として、演<sup>や</sup>りたいんじゃ！」

自分でも思いもよらない言葉に、叶人は戸惑った。だけど、それが自分の本心だというのはわかった。帰る場所、頼るもの、それら無くした今、拠<sup>よ</sup>って立つのは己のルーツしかない。だから叶人は言葉を続けた。

「でも、今のまんまじゃ、俺は何も持つてない。原爆がどんなもんか、あの日広島がどうなったか、それは知つとる。でもそれは知つとるだけなんよ。俺はあの日を感じたい。おやじが見たあの日を俺も見たい。怖<sup>こ</sup>いだけじゃない、残酷なだけじゃない、そんな景色を

俺も見たい。なあ、それで俺は初めて俺の芝居が出来る」

叶人は、ツ　と回線の切れた音だけを漏らしている携帯をたたんだ。受話器をフックに叩きつける音が、いつまでも耳の中に反響する。いつの間にか前のめりになっていた身体を再びビルの壁に預けて、軽く目を閉じる。冷たい風。暗い空を照らす街の明かり。道行く人々のざわめき。そこには灰の混じった熱い風も、太陽を隠す黒いキノコ雲も、焼け爛れた人々のうめきも、何一つ無かった。あるのは、相変わらずの現実。平和な、日本。叶人は少しだけ肩を落として、その中に歩いていった。

次の日から、叶人は資料を読みふけた。父親に話を聞けないのなら、自分である日にたどり着くしかない。原爆だけではない、あの時代の資料に手当たり次第に当たった。人々は何を考えて暮らしていたのか、なにを夢見て生きていたのか。それらを無味乾燥なデータから、体験者の残した言葉から、少しずつ拾い集めていく。

東京で活動している語り部の存在も知った。被爆した自らの体験を後世に残すため、それを語ることを決意した人たち。早速会う約束を取り付け、話を聞いた。体験者の口から直接聴く言葉は、紙に書かれた体験談よりも強く心に響いたが、語りなれた口調と時折混じる政治的な主張が、感情に水をかけて現実へと連れ戻す。知識だけが膨らんで、ただ澱のように叶人の心に降り積もる。

広島に行くかあ。ぼろアパートの床に図書館で借りた資料を枕にして寝転んで、叶人はつぶやいた。バイト代が振り込まれたばかりのはずの口座を思い浮かべ、ため息を吐く。だけど、平和公園の記念資料館には、もう一度行っておきたい。幼いころは目を逸らすのが精一杯だった遺産たちと、今度はちゃんと向き合って。出来たら長崎にも……。金を貸してくれそうな友人の顔を、一人ずつ思い浮かべる。出世は確実だぜ。ある時払いの催促無し……

そのままぼんやりと眠りに滑り落ちながら、もう帰る場所ではなくなった広島を歩く。本通り商店街を抜けて原爆ドームを右手

に見ながら、元安橋を渡る。周りの大人たちの顔がずいぶん高いところにある（わしが、ガキのときか）。とても懐かしい、暖かく柔らかな手に引かれて（母さん？）折鶴を掲げた原爆の子の像を通り過ぎ、平和の火を横目に見ながら、記念資料館前の広場へ。石畳のそこを埋め尽くす、平和の象徴たる鳩の群れが絨毯のようにうごめく（ほうよ、昔やあ、広島中鳩で一杯じゃった）。つないでいた手が渡してくれた袋に小さな手を突っ込んで、エイッと、餌をまく。津波のように押し寄せ、餌を奪い合う鳩たちに半ば恐れながらも、キヤッキヤと歓声を上げる。だけどそのとき、鳩たちはざんつと一斉に飛び立って

薄汚れた天井を見上げながら、叶人は眠りから醒めた。時計に目をやる。いくらも時間はたっていない。そのとき、ごそつという音が、玄関の扉から聞こえた。郵便受けから差し込まれた茶封筒が、自らの重みでずれおち、そして、床にあたって音を立てた。

なんだ？ 叶人は立ち上がってそれを拾う。汚い字で書かれたあて先は、近藤叶人。間違っていない。裏返して差出人を確認する。

近藤 六郎。

おやじ？ 叶人はあわてて封を破る。中には、鉛筆でびっしりと埋められた幾枚もの便箋。何度も書いては、消したあと。

あの日、起きたこと。あの日、見たこと。あの日、感じたこと。焼けた街。落ちた橋。死にゆく人。生きていた自分。とつとつと、記される記憶。

被爆者に対する偏見。原爆症の恐怖。身体に残る被爆の痕。妻になる女性との出会い。子を持つことに対する恐れ。そして喜び。名に込めた祈り。再び訪れた失う悲しみ。不器用につづられる想い。

その夜、叶人は何度も何度もそれを読み返した。そして、少しだけ眠った。

夢の中で、叶人はスクリーンを見つめていた。その中で、やはり叶人が家族と暮らしていた。そこで、叶人は加藤匡史という名前だった。そして愛する妻、紗枝。義父、元治。原爆によっていずれ失

われることが決まっている、幸せな風景。いつしかスクリーンは消え、そして、叶人と匡史は重なるようにひとつになった。

これで、俺は演じられる。

朝が来たとき、広島を訪ねようとは、もう思わなかった。

#### 四話：克蘭クイン

撮影が始まった。ロケはアメリカで行われた。ハリウッド！ストーリーのメインは昭和天皇のチームだから、叶人たち、広島ของทีมのスケジュールはかなり余裕があった。

何だよ、ハリウッドといっても大したことねえじゃねえか。広島町並みを再現した巨大なセットにびびりながら、妻である紗枝役と義父である元治役、二人の共演者たちと笑いあう。

大したことない。大したことない。って、アメリカと戦争してたときの日本って、こんな気持ちだったんじゃない？

いやあ、違うと思うぞ。

妻　の軽口に、義父　が突っ込む。

ねえ、かあくんはどこに住んだの？

周りを見回しながら、妻　が聞く。叶人が抜擢された理由が、それだけではないにしろ、広島出身の被爆二世だからだという噂は、共演者、スタッフ、みんな知っていた。叶人自身も、それを否定しなかった。幾度かのミーティングのあと、叶人はビルに尋ねてみたのだ。彼はにやりと、スクリーンの向こうで何度も見せた笑みを浮かべ、答えてはくれなかった。

何を言ってるんだよ。この街はこのあと焼けちまうんだぜ？

そうだった。

お気楽に笑う　妻　。

若い子は違うな。下調べも何もなしかい？

義父　の小言。日本の映画界では、渋めのバイプレイヤーとして名前を知られている彼の言葉に、妻　はあわてて首を振る。

だって私の役は、かあくんの心配しながら子供を一生懸命育てる、普通の女なんですよ？　いつの時代だって、その気持ちに違

いは無いですよ。

ね？ かあくん。そう言ってくるりと振り返って覗き込んでくる妻の笑顔に、叶人はどきりとする。十代半ばでアイドルデビューし、鳴かず飛ばずのまま女優に転身した彼女は、しかし映画の世界で徐々に認められ、もうすでに映画の主演も経験している。

自分と比べてキャリアも実績も上回る二人に囲まれても、叶人は物怖じすることは無かった。己の演技に自信があるから、なんて理由ではない。これまで映画ではエキストラに毛が生えた程度の役しかもらったことは無かった。十年かかって積み上げてきた自信は、荒田に突き崩された。ただ、ここはハリウッドで、非日常に満ち溢れた街で、二人は愛する妻で、敬愛する義父で。

叶人は、夢と現のはざ間でまどろみながら、夢という名の現実を目覚めるときを待っていた。

(アクション)

「さっちゃん……」

「匡史さん！ おかえりなさい」

ライトを落とされたスタジオの中、再現された紙屋町にあるパン屋の前を掃いていた 紗枝 が、 匡史 の声に振り向いた。光量の低いスポットに照らされた、化粧つ気のない顔の中で、大きな瞳がきらめいて、そして笑っている。

「おやつさん、おってか？」

「うん、おるよ。奥で寝よう。呼ぶ？」

「いや、ええ」

首を傾げるその仕草にはにかみながら、 匡史 は頭を振った。「ちよつと話があるけえ。上がらしてもろつてもええか？」

そういうと、 紗枝 がうなずくのを待たずに、右足を引きずりながら店の間口をくぐる。カメラが回り込んで、 紗枝 の身体をなめながら、暗い店の奥を映しこむ。ぎこちなく振り返る 匡史 をズームアップ。

「さっちゃんも……すまん、一緒に来てくれ」

カメラはそのまま 紗枝 にパン。不審げな様子の彼女がうんとうなずき、ほうきを片付けるところをそのまま追う。

（カット）

別のセット。部屋の奥から、みつあみにまとめた髪を解きながら、上がり框から上がる 紗枝 。

「お父ちゃん。匡史さんがきんさった。話があるんじゃないて」

その後ろで、 匡史 は上目遣いで軽く頭を下げた。

（カット）

「おお、匡史か。なんな」

薄い布団に包まって横になっていた 元治 が、大儀そうに身体を起こした。今度は店の表側、低い位置からカメラが狙う。肩に布団をかけたまま、胡坐をかく 元治 。枕元に横座りに座ったもんぺ姿の 紗枝 は、みつあみにしていたせいで波打つ髪に手櫛を通して、灯火管制のために黒いかさをつけた白熱球が光の円を描くその端に、 匡史 は右足を伸ばしたまま座り込む。

「おやっさん。具合が？」

「なんのこたあ、なあ。ここんとこ、粉が悪うて、膨らすんに、時間がかかったの」

そう言いながらも、 元治 の顔に疲労の色は濃い。

「すみません。わし、せつかく仕込んでもううたのに、手伝いも出来んで……」

「なによんなら。わりや、お国のために、働きよるんじやろ  
が」

伸ばした 元治 の左手に、 紗枝 が煙草盆を寄せる。配給の  
【金鶏】に火をつけ、旨そうに目を細めて、煙を吐き出す 元治 。  
「で、話ゆつて、なんなあ」

「ああ」

匡史 は少しだけ口ごもると、曲がない右足が許す限り居住  
まいを正す。

(カット)

手前中央左に 紗枝 の後姿を置いて、擦り切れた畳に両手をつ  
く 匡史 。

「おやっさん。わしにさっちゃん……」

いったん言葉を切り、肩で息を吸う。

「紗枝さんをください」

髪を梳いていた 紗枝 の指が止まった。彼女の顔の角度が変わ  
る。しかし、 匡史 の視線は、 元治 にだけ据えられていた。  
ゆっくりと吐き出される煙と、とんと 紗枝 の陰で落とされる  
灰。骨ばった手が、胡麻塩頭を撫でる。

「わし、こんな身体じゃけえ、お国を守るためには戦えん。この足  
が曲がりやあゆつて、あん事故がなけりやあゆつて、ずっと思うち  
よった。お国のために戦こうて、死んで帰ってくるもんに申し訳の  
うて……。そがなわしが、嫁をもらつてええもんかわらん。みな、  
遠いところで戦こうとするのに。ほいじゃけど、わしは、国を守つては  
戦えんけど、せめて、紗枝さん……さっちゃんだけは守りたい。そ  
れで、わしは初めて戦える。そんな気がするんじや」

深く頭を下げる 匡史 。カメラはゆっくりと回り込んで、まだ  
長い煙草の火を灰皿に押し付ける 元治 にフォーカスを合わせる。  
新しい煙草を取り出して口にくわえ、そして火をつけないまま、煙

草入れに戻す。軽くたんを切るようにのどを鳴らし、目上げる。

「紗枝……」

（カット）

元治 から 紗枝 にカメラはフォーカスを移す。名前を呼ばれた彼女は一度父親を見るとちらりと 匡史 のほうに目をやり、そして恥らうように顔を伏せた。

（カット）

撮影は進んでゆく。

一九四四年十月二十五日、レイテ沖海戦。神風特攻隊による攻撃が初めて行われた日。 匡史 と 紗枝 の結婚式が、質素ながらもしめやかに執り行われる。配給されたわずかな酒に顔を染めた元治 の謡う調子はずれの高砂<sup>たかさご</sup>が、雨模様の空に吸い込まれた。

一九四五年三月。すでに両親が他界している 匡史 は、以前住んでいた家を引き払い、元治 の家で暮らしている。少しずつ目立つようになってきた 紗枝 の腹に耳を押し付けるのが、工場から帰ってきた 匡史 の日課になっていた。まだ動かんよ、そう言うて笑う 紗枝 。同月十日、東京大空襲。同じく二十六日、硫黄島陥落。

同年六月二十五日深夜。働きづめだったせいか微熱を出し寝込んでいた 紗枝 が、産み月に満たぬまま、突然産気づく。騒ぎを聞きつけ集まった婦人会の女性たちがお産の準備をする中、なすすべもなく立ち尽くす 匡史 。満月の光が照らす中、元治 の吸うタバコの煙がゆらりと揺れる。そして月が西の空へと傾き、空が白々と明けるころ、新たな命の誕生のあかしが、確かな力強さを持つて響き渡った。喜び勇んでいざりよる 匡史 。汗ばんだ額にほつ

れた前髪を張り付かせた 紗枝 はまだ少し熱に浮かされたような顔に、しかし誇らしげな表情を浮かべていた。その横に、文字通り真っ赤な顔で泣き続けている、早産のため少し小さな赤ん坊。二十六日払暁、長子誕生。一睡もせず、疲れているはずの 匡史 も、心の中に確かな満足感を満たしたまま、職場に向かう。その手には、初めて抱いたわが子の重みが、ずっと残っていた。その日、沖縄陥落。

同年七月二十六日。アメリカ合衆国、英国、中華民国の三国による、十三条からなる降伏勧告が行われる。いわゆる、ポツダム宣言。日本政府はそれを黙殺。赤ん坊を加えた四人での、お宮参り。祝詞を受ける間、産褥のやつれからまだ回復もしていない、そして地味ながらも和装の 紗枝 が 元治 の抱く子を覗き込んで笑い、 匡史 を振り返る。 匡史 は彼女らを、どれほど愛しく思っていたのだろう。お参りがすんで帰る道すがら、父親からわが子を受け取ってあやしながら歩く妻の肩を、そっと抱き寄せる。その前日、トルーマン大統領によって原爆投下の命令がすでに発せられていたことを、誰も知らない。

そして

同年八月六日。その日……

空は高く、どこまでも澄んでいた。

## 五話：灰色の涙

学徒動員の少年たちに混じって点呼を受けた匡史は、受け持ちの旋盤に油を差し始める。いつもならこの時間、すでに旋盤は屑屑を撒き散らしているはずなのだが、小一時間ほど前に発令された空襲警報のために、作業開始が遅れていたのだ。工場の屋根はすでに真夏の陽射しに灼かれ、少し動いただけで、汗がにじみ出る。

「今日も暑うなりそうねえ」

線材の入った重そうな箱を抱えた男が、そう匡史に声をかけてきた。まだ幼さを残した顔つきのその男は、川谷。徴兵猶予を受けている師範学校の学生だ。そんな彼らも、まず文系学生が戦地に送られ、残った理系の学生たちも、こうして学徒動員として働かされていた。

「口じゃなしに、手え動かせ。終わらんじやろうが」

「そがぁなんいうても、ゆうべも空襲警報が出て、寝ちよらんのんじゃけえ。眠とうてやれんわぁ」

「そがぁなん、誰でも同じじやろうが。ええけえ、働け」

相手をするのが面倒になって、匡史は再び機械に向き直る。しかし川谷はまだ話し足りないのか、線材を作業台の上に移しながら続ける。

「そりゃあ、加藤さんはええよ。帰りゃあ嫁さんがおるんじやけえ、そりゃ早う帰りたいじやろ。ほいじゃけど、わしらあ寮に帰るだけじゃし。どうせいつか、赤紙がくるんじやし。ああ、わしも足が悪けりゃあ」

「なにが言いたいんな」

匡史は一度回し始めた機械を止めた。一步、川谷に歩み寄る。寝不足と暑さは、出口の見えない戦況に対する不安と苛立ちに、油を注いでいた。

「わしもびつこじやったら、兵隊に取られんとすむし、嫁さんもろ  
うてやり放題じゃもんな」

「わりゃあ、もういつぺん言つてみい！」

「こらあつ。貴様ら、なにをしとるかっ！」

怒声が聞こえ、事務所のほうから軍服を着た男が二人を指差し、  
早足で近づいてきた。川谷はちつと舌打ちをする。匡史もびんたを  
覚悟して、そちらに向き直った。そのとき

開け放した窓の外が、白い光で埋め尽くされた。

何だ？

その思いは言葉にはならず、ただ驚愕を表情に貼り付けて、皆が  
一斉に窓を振り向く。その瞬間、耳を聳する爆音とともに、工場が  
揺れた。窓の周りの壁が内側へと膨れ上がり、屋根がめくれ上がる。  
皆はそれぞれ頭を抱え、地面に伏せる。天井が崩れ落ち、もうもう  
と立つほこりが、すべての視界を覆いつくした。

「加藤さんっ！ しっかりせえ！」

「くつ。なんが……」

匡史は男に助けられて、瓦礫の下から這い出した。まだ塵埃が舞  
う中、肩を支えられて外へと向かう。なにが起こったのかわからな  
い。ただ男が導くままに、足を引きずりながら進む。灰色の視界の  
中、男の顔だけが、赤い。

「か、川谷……」

その声にはこたえず、頭の傷口からだらだと血を流しながら、  
川谷は匡史を運ぶ。

匡史は辺りを見回した。ついさっきまで皆が働いていた工場は、  
見る影もなかった。上を見上げれば天井はすべて落ち、青い空がほ  
こりの向こうに透けて見える。

「も、もう大丈夫じゃ。なにがあつた？」

空襲か。しかし警報は鳴らなかった。事故か。燃料庫か弾薬庫が

爆発したのか。だが川谷は答えない。しかし突然、足を止める。

「もうええ。歩ける」

匡史は川谷を振り払った。だが、彼はそれにも気づかない様子で、呆然と空を見ていた。

「川谷？」

「加藤さん……あれ」

ガラガラとしゃがれた声で、川谷は空を指差す。なんなあ、そう口を開きかけた匡史は、その方を見上げて絶句する。みたことのない形の雲が、もくもくと天を目指してせりあがっていた。まだ低い太陽に照らされたそれは白と灰色をぐるぐると入れ替えながら、徐々に大きく、そして、高く上っていく。

「ア、アメリカの 新型爆弾じゃ」

ポツリと聞こえたその声に、匡史は我に返る。そして辺りを見回して、息を呑んだ。何もかもが

崩壊していた。

「なんじゃこりゃあ」

「加藤さん。あんた、家え帰れ」

うめくような川谷の声が聞こえる。いや、うめいているのは川谷ではない。そこここに転がり、血まみれになったたくさんの人。彼らが上げる声だった。

「川谷、お前は」

「わしは、みんなを助ける」

「なら、わしも」

「加藤さん、しっかりせえ。ありやあ、どっちのほうな！」

川谷は再び雲を指差した。それは、間違いなく広島市街の中心部。匡史の帰るべき家のある方角だった。

「紗枝っ」

周りの音が、徐々にうめき声から、助けを求める声、互いの無事を確かめようとする声に変わる。工場の中からよるめきながら、傷ついた人々が歩み出てくる。

「さつきはすまんかった。昨日、兄ちゃんが帰ってきて、わしもいつか兵隊に取られて、あんなこま箱に詰められるんか思ったら、ろくに女も抱かんまんま死ぬんか思ったら、急に怖あなつて。ほいで、あんたの顔を見たら、急に妬ましゅうなつて」

「川谷」

「ええけえ、行けえ。どうせ、あんたみたいなびっこがおつても、足手まといになるだけじゃ」

そついい捨てると、川谷はすぐそこにうずくまっている人影に走りよつた。大丈夫か、しっかりせえ。そう声をかけながら助け起す。

「すまんっ！」

匡史は彼らに背を向け、曲がらない右足が許す限り走り始めた。

町中に広がる炎が雨を呼んだのか。肩を打つ煤を含んだ黒い雨が、匡史の顔を斑に染めていた。灰色に染まる世界の中、匡史はただ立ち尽くしていた。

「ここは……どこなあ」

黒く焼け焦げた瓦礫だけが、あたり一面を覆っていた。鉄筋コンクリートのビルディングだけが、雷に撃たれて焼け朽ちた大木のような姿をあちらこちらに晒していた。向こうには、丸い屋根の産業奨励館が、くすぶっている。

「紗枝……紗枝　　っ！」

匡史の叫ぶ声が、無音の世界に吸い込まれる。この場にたどり着くまでに通り過ぎた地獄のような景色は、ここにはなかった。うめき、水を求め、一步ごとに倒れゆく、幽鬼の群れ。ガラスの細かい破片を半面にくまなく突き立てられながら、それでもひいひいと泣く赤子。それを守るように抱きしめたまま、息絶える母親。服も、その下の皮膚さえも剥ぎ取られ、明らかに息をしていない赤子をさしあげながら、助けを求め続ける母親。道端に座り込み、何一つい

つもと変わらない様子で、黒焦げになった赤子に乳を含ませている母親。その誰もが、紗枝ではなかった。

そして、ここにあるのは、匡史の守るべき、小さなしあわせを築いていくはずだったこの場所にあるのは、ただの静寂だった。

雨が落ちる音さえも、聞こえない

瓦礫の様子から、パン屋があつた場所のあたりをつけて、手当たり次第に掘り返す。融けて形が変わった瓦。へしゃげた鍋。そして

……

「うおっ」

周辺よりも少し盛り上がって積みあがつた瓦礫が、匡史に降りかかってきた。避けきれずに下半身をうずめた匡史がもがき出る。何か、レンガで積み上げたものが、そこに顔を覗かせていた。

「これは」

あわてて掘り出して、黒くすすけた表面を撫でる。雨に濡れていても、まだほんのりと熱い。くんくんと鼻を鳴らす。瓦礫と肉の焼ける臭いに混じって、かすかに漂う香ばしい香り。それは、元治が何よりも大事にしていた、パン焼き窯だった。無我夢中になって、さらに瓦礫を掘り返す。ガラスやトタンが、顔を、腕を、手のひらを切り裂く。

「大丈夫、大丈夫よな。お前はここにはおらん。とうにとつかに逃げて、無事である。ほうよ。こんな　こんなところにおるはずが

」

だが、匡史は急に手を止め、中腰のまま立ち尽くした。一瞬というには長い時間、あるべき景色が彼の目の前に広がる。

朝日が半ばまで差し込むほの明るい店内、首にかけた手ぬぐいで汗を拭いながら、窯の火の様子を見る匡史。少し離れた場所で、腕に抱いた赤ん坊に、ええにおいがしてきたねえと、笑いながら語りかける紗枝。上がり框に腰をかけて、煙草を喫う元治。しかし、そんな幸せな日々はゆっくりと、ゆっくりと、光に包まれて

「さええええっ」

下半身をまだ瓦礫にうずめたまま、頭を匡史に向けて横たわる炭くれ。

その両腕に小さな塊を抱いて。

「あ…… ああ」

匡史はその横にしりもちをつくように座ると、手を伸ばして大きな方の塊を　　変わり果てた妻の頭を　　そつと撫でた。滑らかな黒髪の手触りの代わりに、ざりつとした感触。構わずに、そのままた体の線に手を這わせる。その下に腕を差し入れ、座ったまま抱き上げる。ぽろぽろと、表面が剥がれ落ちる。だけどそれはしつかりと、小さな塊を離そうとしない。匡史はそのふたつの塊を　　妻と、息子を、抱きしめ、顔をうずめた。

その肩を絶え間なく雨が打つ。空がもう洗い流されたのか、激しくなるにつれ透き通ってきたその雨が、大地をくまなく叩く。それでも消えきらずにくすぶる煙が、廃墟をぼんやりと霞ませる。

「なんでよ」

顔を伏せたまま、くぐもった匡史の声が、低く響く。

「わしゃあ、なんもしたらん。紗枝。わしはお前を守るゆうて誓った。お前のために戦うゆうて……。それなのに、わしゃあ、なんもできなかった。お前は、お前はちゃんと赤ん坊を守ろうとしたのに」

柔らかな産毛に覆われているはずの、触れば最高の白パンよりもやわらかいはずの、小さな黒い塊を、汚れた手で包み込む。それを硬く抱きしめたまま、決して離そうとしない紗枝の、細い腕。

「なあ、わしはずっと思うとったんよ。いつか戦争が終わって、またパンを焼けるようになったら、お前と子供に、腹いっぱい食わしたろうゆうて。戦場に行けんわしが戦えるんは、それくらいしかないのにな。それなのに　　」

匡史は顔を上げた。心の痛みにゆがめ、天を見上げる。

「なんで、なんでそれくらいのことをやらせてくれんっ！」

そのとき、つかの間雨が上がった。わずかに光が差し込む。だけ

ど。

二人の家族の欠片で黒く汚れた彼の顔を、涙がずっと、洗い続けた。あごから、ポツリ、ポツリと滴り落ちる、灰色の涙。

「カーツト」

静かだったスタジオに監督のビルの声が響いた。臨場感を出すために実際に降らされていた雨が止められる。

「これで、広島チームの撮影は、すべて完了しました。お疲れ様です」

ビルの横で、通訳の男が声を張り上げる。スタッフがいっせいに叩く、拍手の嵐。

叶人はぼんやりと周りを見回した。実際に掘り返すために作られた周囲の瓦礫以外は、あとでC・Gと合成するためのブルーバックスクリーンで囲まれている。大またで歩いてきたビルが、笑いながら肩を叩き、まだ座ったままの叶人を引っ張りあげた。道具方が一斉にセットの撤収を始める。まだ若いスタッフの一人が、叶人が抱えたままだった黒焦げの人形を受け取ろうと、手を伸ばす。

「あゝ」

叶人は一瞬それに抗いかけて、ビルに腕を掴まれる。

「イトトワズオーレディオウヴァ、ユウノウ」

もう終わったんだ。そう言っただけで叶人の背中を強く叩くと、また大またでビルは歩き去る。

「お疲れさまあ。ん？ どうしたの、かあくん。ぼんやりしちゃって」

「今日は飲むぞ、付き合え」

叶人はその声に振り向いた。前日すでにすべての撮りを終えている二人の共演者が、そこに立っていた。もちろん、メイクも衣装もつけていない。ジーンズに思い思いの टीーシャツ を着た、さっきまで家族だったふたり。

「あ、……いや」

止まっていた涙が、決して芝居ではなかったそれが、再びあふれ出した。涙の向こうに立つふたりに、紗枝と元治の姿が重なった。

夢を、見ていた。荒田さん 座長。俺は、確かに夢の中で生きてたよ。

叶人は黒インクを薄く混ぜた雨にぬれたままの袖で涙をぬぐい、ふたりに笑いかける。

「なんでもない。すぐに着替えてくるから」

## 最終話：広島

その後一月あまりで、昭和天皇のチームもクランクアップを迎え、監督の元で編集を重ねられた映画は、無事試写会を終えた。二部作の一方、ホワイトハウスを描いた作品はすでに公開されており、そこそこの興行成績を残していた。そして「灰色の涙」は、第一部を越える成績を期待されていた。

十二月初旬、まずは世界に先駆け日本で公開、次いで年内にアメリカで公開。それと同時に、賞候補としてその名がささやかれ始める。作品賞もしくは外国語映画賞、主演男優賞、美術賞その他。

その中に、助演男優賞として、叶人の名もあった。日本国内のマスコミも、裕仁役の俳優に次ぐ扱いで、叶人を取り上げた。結局それは、前哨戦と呼ばれる映画賞で受賞を逃し、本番ではノミネートすら逃したことで急速に醒めていったが、演劇の世界における叶人の評価を高めるには、十分すぎるほどだった。

映画自体も結局、撮影賞ひとつを受けるにとどまったが、興行成績はしばらく国内ランキングを独走した。叶人の元にも、映画、舞台、テレビを問わずオフアールが舞い込み、マネジメント契約を延長した新劇座を拠点に、あわただしい日々を送り

福岡から大阪への移動日にぼっかりと明いた空白。叶人はふと気が向いて、広島駅のホームに下りた。アッセでお好み焼を食べ、すぐに発車しそうな路面電車に、行き先も確認せずに飛び乗る。

ああ、広島港行きか。映画の舞台になった原爆ドーム方面にはこの電車は行かない。まあいいさ。このまま乗っていけば、生まれ育った家の近くまで連れて行ってくれる。しかし、叶人は途中、比治山下の電停で電車を降りた。

結構変わったな。確かこの辺りに友人の家があつて

あわただしさに疲れた心を癒すように、比治山公園に足向け、

そのまま山の反対側へと下りる。おお、そついや、こんなんが出来たゆうて言うつつたな。山のふもとにそびえる、複合型のショッピングセンターによってみる。ふーん、シネコンも入っとるんか。

そこではまだ、「灰色の涙」の上映が続けていた。ふと気まぐれにチケットを買い、ドアをくぐる。公開から日もたった平日の昼間らしく、決して大きくない客席には、数えるほどの人影しかない。

叶人は真ん中あたりに腰を掛け、久しぶりに見る画面に目をやった。映画は序盤の終わりがけ、レイテ沖のシーンだった。米艦に向けて、日本機が特攻していく。それらが炎に包まれることに、少し離れた席に座る若い男が、すげえとかかけえとか歓声を上げる。確かに迫力がある場面だから、叶人にもその気持ちは分からなくはないが。

シーンは変わって、戦況の報告を受けた昭和天皇の、苦悩に満ちた顔。最前列に座る中年女性二人組が、いやー、と小さく声を上げる。裕仁役を務めた俳優のファンなのだろう。彼がいないシーンではポップコーンをむさぼりながら、頭を寄せ合って嬉しそうに何事か話している。

これが今の日本か……

叶人は、ふと醒めた。戦争も、人の死も、苦悩も、平和な生活に慣れた人々にとっては、しょせん娯楽に過ぎない。自分にそれを非難することは出来ない。なぜなら、それらを映画というエンターテインメントに作りかえてしまったのは、他でもない、叶人たちなのだから。

（わしが柱ん下から這い出たときにやあ、はあ火がねきにきょうた助けてくれゆうて、いろんなものの声がしょうたが、わしやあ、逃げるしかなかった。あん中にやあ、母ちゃんや、姉ちゃんの声もまじつつたはずじゃのに）

（周りのもんが、ばたばた死んでいくんが怖あて、さんざん、人が死ぬるんや人を焼くんを見てきたはずじゃのに、いつわしもあなるんか思ったら夜も寝れんで。いっそのこと、あの日に母ちゃんら

と一緒に死んじよったら、こがあとにづらい思いをせんでもよかった  
ゆうて、なんべんも考えた）

（被爆者じゃいうたら、毒がうつるゆうてろくな仕事にもつけんけ、  
ほんまに、なんで生きようるんかわかんかったが、そがあなとき  
に母さんと会ってな。ピカにおうてから初めてよ、生きとってよか  
った思うたんは）

父親の手紙を読んだときに感じた思いは、結局、自分の演技には  
込められないままだったのだろうか。それ以上映画を見続ける気にな  
れず席を立とうとしたとき、ずっとという、鼻をすする音が聞こえ  
た。今スクリーンに映るのは広島町の町並みを二人が歩く、なんでも  
ない場面。それなのに涙を流しているのは、斜め前に座っている、  
ハンチング帽をかぶったままの老人だった。戦前の広島を覚えてい  
る人なのだろうか。特に広島島のシーンになると食い入るようにスク  
リーンを見つめ、時折涙をぬぐっている。その左腕の甲に、暗い明  
かりの下でも浮かび上がる蚯蚓腫れのような痕が……

ありやあ、ケロイドじゃ　おやじ？

間違いなかった。叶人が役者になるというのを、河原乞食と嫌いの  
のしり、決して認めようとしなかった父親が、叶人の出ている映  
画を観て泣いていた。

（わしは、子を作るんが怖かった。そりゃあ、自分が死ぬかもしれ  
んいうんとは、比べもんにならんほどよ。ピカ受けたもんの子は、  
ちんばが生まれるいうてみんなが言ようたけえ。ほいじゃけど、母  
さんはそれでも子が欲しいゆうて）

（わしも母さんも被爆者じゃけえ、いつまで生きとれるかわからん  
そんなん、一人で生きられん子を産むんは哀れじやろう言うた）

（わしも、母さんも、身よりはみなピカで死んだ。戦争中でしたい  
こともなんもかんも辛抱して、そのあげく、なんもでけんうちに焼  
け死んだまなの思いを継ぐ子が欲しい、母さんはそう言うた）

（ワレの名前はの、叶えられんかった皆の夢を叶えてくれゆう、そ  
ういう意味なんよ）

「おやじ……」

映画が終わった。館内に明かりがとる。叶人は涙をぬぐっている父親に気づかれないように席を立ち、外へ出た。

安心せい、おやじ。俺はまだ夢の途中やけど。役者としちゃあ、まだまだ中途半端かも知れんけど

エスカレーターでショッピングセンターを上から下へ通りながら、いろんな人が買い物を楽しんでいる店内を見回す。いつも見慣れた、平和な光景。

忘れんけえ。俺がこうして夢に現を抜かせるんは、おやじの、母さんの、この平和を命をかけて残してくれた皆のおかげじゃいうんは。

エントランスを抜けて、店を出る。両手を伸ばし、大きく背伸びをする。生まれた場所に帰ってきた、叶人は広島に降り立って初めて、そう実感していた。

酒でも買って、今日は久しぶりに家で寝るか。

玄関前で待っている自分に気づいたときの父親の顔を想像して笑う。

空はいつもと変わらず、高く澄み渡っていた。

( f i n )

## 最終話：広島（後書き）

この作品に次のような台詞があります。

「原爆を投下したことで、戦争を早く終わらせることが出来た。もし、その出来事がなければ、さらに百万を越える貴重な命が失われる結果となっていただろう」

ちょうど連載中に、元防衛相、アメリカの高官と相次いでこれと似たような発言をして、物議をかもしています。

非常にもっともらしく聞こえるこの言葉は、しかし原爆を開発し、容認しようとする人々が恣意的に流した言葉であるという側面をもっています。

私はその後の台詞を叶人に言わせるために、この言葉をわざと使いました。書いている最中には、まさかこんな言葉を一国の要職にあるような人が口にするとは思ってもせずに。

原爆が投下された理由。それはこんなきれいごとであらわせるようなことではありません。

本当は参考資料を載せようかとも思ったのですが、適当なものが見当たらず……

ぜひ皆さんの手で、原爆が投下された理由についていろいろ検索してみてくださいいただければなあと思います。

前書きでも書きましたように、この作品は「みちのく芸能まつり花火大会」のために書き下ろしたものです。

作中、原爆のことを「ピカ」と表記していますが、私が子供のころは「ピカドン」といっていました。たぶん、「はだしのゲン」に出ていたのだと思いますけど。

まずぴかっと閃光が走り、そのあとどんっと衝撃波がくる。だから、ピカドン。

思えば、花火だってそうです。

まずぴかっと色鮮やかな光が広がり、そしてどんっと腹を揺さぶる音が聞こえる。

同じ「ピカドン」であるならば、世界中の空に輝くのが核の炎ではなく、美しい花火であって欲しい。そう心の底から願います。

最後に……

こんなあとがきまで付き合っただけの方に、平和への祈りを心に秘めている方に、そしてその身を犠牲にして私たちに平和を残してくれたすべての方々に、百万遍の感謝を。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2438c/>

---

灰色の涙

2010年10月8日15時04分発行